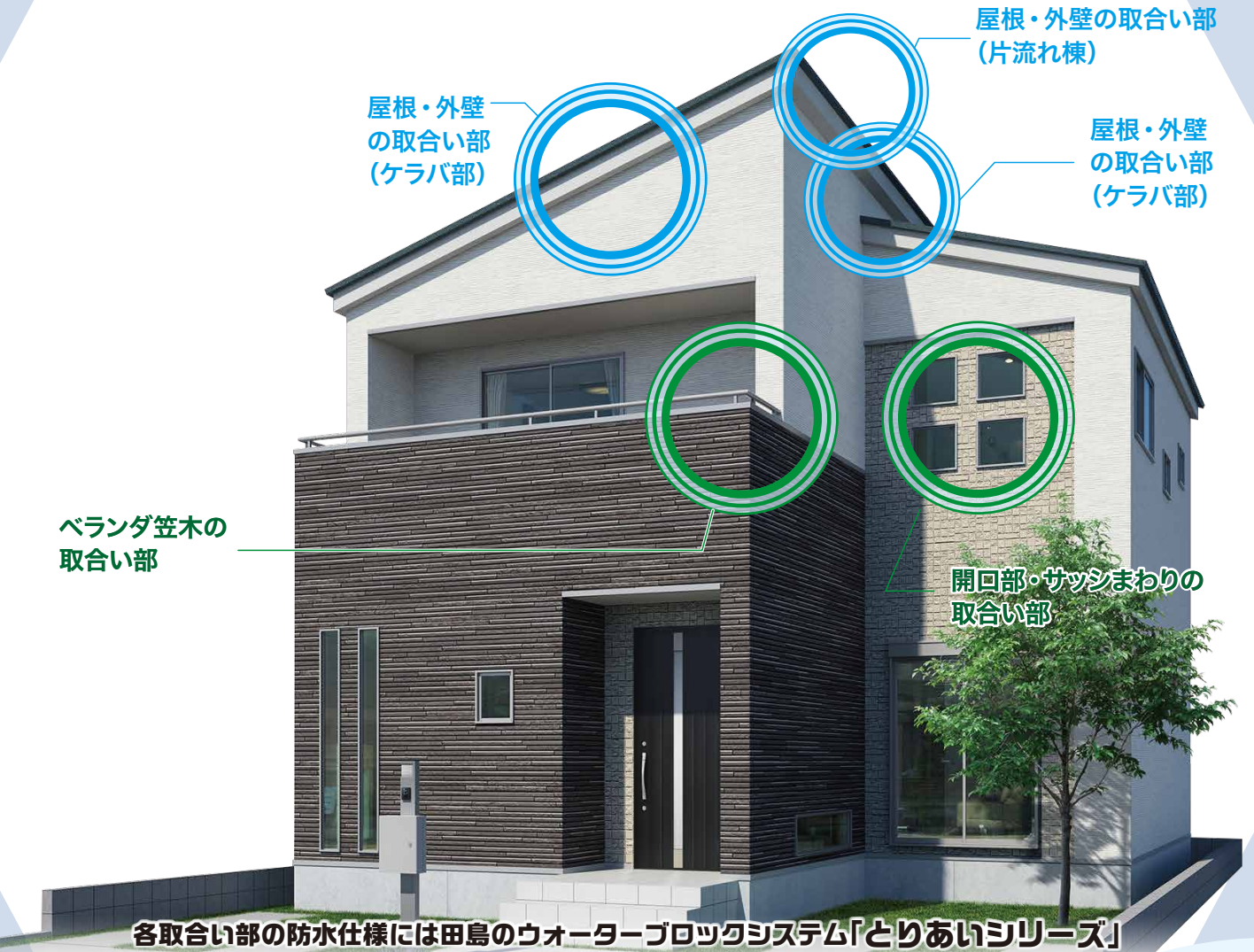


とりあいシリーズ

雨から家を守る外壁の防水「田島ウォーターブロックシステム」

従来、外壁の防水にはアスファルトフェルトや透湿防水シートが使用されてきましたが、軒の出が小さくなるなど建物形状が変わってきたことや、出入隅など複雑な部位が増えてきたことで、単にシート状の材料を張るだけでは雨水の浸入をくい止めることが難しくなっています。壁からの雨漏りは、特に開口部まわりやサッシ周り、ベランダ笠木など取り合い部に多く発生しており、この部分の処理が非常に重要です。



屋根・外壁の取合い部
(片流れ棟)

屋根・外壁
の取合い部
(ケラバ部)

屋根・外壁
の取合い部
(ケラバ部)

ベランダ笠木の
取合い部

開口部・サッシまわりの
取合い部

各取合い部の防水仕様には田島のウォーターブロックシステム「とりあいシリーズ」

屋根・外壁の取合い部に

屋根と壁の取合い部専用雨仕舞材
改質アスファルト系防水シート

壁止まりシート

「軒ゼロ」仕様の雨仕舞強化に対応
改質アスファルト系防水シート

とりあいルーフィングF

開口部・サッシまわりの取合い部 ベランダ笠木の取合い部に

伸張性防水テープ

ノービルテープ

田島ウォーターブロックシステムの
詳細はカタログをご覧ください。



「雨から家を守る外壁の防水」
田島ウォーターブロックシステム
の動画はこちら→



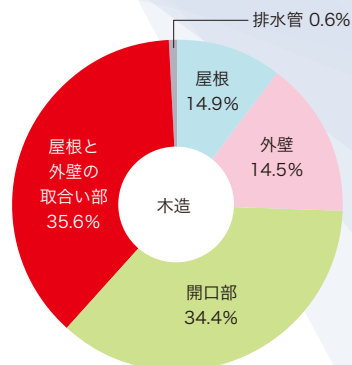
田島のウオーターブロックシステム「とりあいシリーズ」

新築木造住宅、保険事故物件の雨水浸入部位

右のグラフは、住宅瑕疵担保履行法施行後、2008年12月～2020年6月末までに保険契約したうち、保険金支払物件について集計したものです。

木造住宅の雨水浸入部位でもっとも高い割合を占めたのは、**屋根と外壁の取合い部(35.6%)**であり、取合い部の多さが目立ちます。

雨水の浸入を防止する部分
かし保険事故発生部位の割合
※2008年12月～2020年6月末までの累計



【出典】
防水施工マニュアル(住宅用防水施工技術)2021
編集:日本住宅保証検査機構(JIO)
監修:石川廣三
発行:技報堂出版株式会社

取合いは異業種施工間の連携不足がリスクになる

取合い部分は、各工程と関係職種が多岐にわたり複雑に入り組んでいるため、リスクが潜んでいます。木造住宅の雨水浸入箇所のワースト1位は開口部のサッシまわり25.8%、**ワースト10位のうち「取合い」が6項目を占めます。**

順位	部位区分	雨水浸入箇所	10%	20%	30%
1	開口部	サッシまわり			25.8%
2	取合い	笠木と外壁の取合い(バルコニーおよび陸屋根)	4.9%		
3	外壁	外壁の平部	4.6%		
4	外壁	外壁の平部目地	4.4%		
5	取合い	防水層とサッシの取合い(バルコニーおよび陸屋根)	4.0%		
6	取合い	笠木の壁当たり(バルコニーおよび陸屋根)	3.2%		
7	取合い	壁止まり軒部	2.8%		
8	屋根	防水層平部(バルコニーおよび陸屋根)	2.4%		
9	取合い	軒ゼロ棟まわり	2.3%		
10	取合い	軒ゼロけらばまわり	2.2%		

【出典】防水施工マニュアル(住宅用防水施工技術)2021 編集:日本住宅保証検査機構(JIO) 監修:石川廣三 発行:技報堂出版株式会社

各取合い部の防水仕様には田島のウオーターブロックシステム「とりあいシリーズ」

壁止まりシート

屋根軒先と壁との取合い部(壁止まり軒部)は、二次防水層へ雨水が回り込む傾向にあります。あらかじめ屋根下地材と壁下地との間に「壁止まりシート」を施工することで、躯体への雨水の浸入を防ぎます。(※壁止まり棟部も同様の雨仕舞処理が必要です。)



とりあいルーフィングF

近年の戸建て住宅は、軒の出や庇のない「軒ゼロ」の屋根形状、陸屋根やパラペット付き勾配屋根、一体型バルコニーなどの採用により、外壁への雨掛かりが多くなっています。保険法人による漏水事故部位の報告でも「軒の出がない屋根と外壁の取合い部」が上位にランクされるようになりました。「軒ゼロ」仕様の雨仕舞強化に対応する新製品です。



ノービルテープ

ノービルテープは、伸張性のある片面粘着防水テープです。開口部・サッシまわりのコーナーやバルコニー手すり壁のコーナー、貫通パイプまわりなどに最適!伸ばして張るだけで、雨水や結露水の浸入を防ぐことができます。

